慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後・現代イギリス文学における「老い」とその変容
Sub Title	Ageing in post-war/contemporary British fiction
Author	迫, 桂(Sako, Katsura)
Publisher	
Publication year	2013
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2012.)
JaLC DOI	
Abstract	現代イギリス社会における「老い」を、文化的観点、身体論的観点、文学的観点から考察した。老いの意味と経験が文化的要素に深く規定されてること、老いの身体的現実を否定する言説が広く浸透していること が確認され、その過程と様子がさまざまなテキスト分析によって示された。結果的に、高齢化の進む社会において、老年期及び老年者の主体が、他者化されることなく、いかに表象・理解されうるかが大きな課題であること が理解 された。同時に、それに文学・文化作品が重要な役割を果たしうる可能性が明らかになった。
Notes	研究種目：若手研究(B) 研究期間：2010～2012 課題番号：22720112 研究分野：人文学 科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_22720112seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　4　日現在

機関番号：32612
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：22720112
研究課題名（和文）　戦後・現代イギリス文学における「老い」とその変容

研究課題名（英文）　Ageing in Post-war/Contemporary British Fiction

研究代表者
迫　桂　（SAKO KATSURA）
慶應義塾大学・経済学部・講師
研究者番号：60548262

研究成果の概要（和文）：現代イギリス社会における「老い」を、文化的観点、身体論的観点、文学的観点から考察した。老いの意味と経験が文化的要素に深く規定されていること、老いの身体的現実を否定する言説が広く浸透していることが確認され、その過程と様子がさまざまなテキスト分析によって示された。結果的に、高齢化の進む社会において、老年期及び老年者の主体が、他者化されることなく、いかに表象・理解されうるかが大きな課題であることが理解された。同時に、それに文学・文化作品が重要な役割を果たしうる可能性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Aiming to expand the existing understanding of ageing, the project has explored the experience and the meaning of ageing in contemporary society from three perspectives of culture, the body and literature. It has shown various and complex ways in ageing and old age are culturally constructed and has also discovered that the discourses that surround ageing often deny the physical changes that accompany advancing age. This result has highlighted the need in ageing societies for a further effort to understand and represent, without ‘othering’, the experience of ageing and the ageing subjectivity, and the potentially significant contribution that literary and cultural products can make to changing the cultural discourse that negates ageing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：老い・ジェロントロジー・ageing・gerontology・ジェンダー・戦後・現代イギリス文学・戦後・現代イギリス文化

１．研究開始当初の背景

老年期は、社会学、医療・医学、社会政策分野の研究課題・対象として長く扱われていたが、人口高齢化に伴い、英米では、人文学分野でも関心を集めるようになっていた。文学分野でも 2000 年以降「老い」をテーマにした研究が散発していたが、対象とされる作品が限定的で、理論的構築も不十分であると思われた。現代文化における老いの経験や意味をより正確に理解するためには、関連分野の研究成果を有効に活用し、文学テキストの特

性を十分に考慮した文学ジェロントロジーが求められていた。

２．研究の目的

本研究は、戦後・イギリス小説における「老い」を、（１）文化的観点、（２）身体的観点、（３）文学的観点から分析し、その特色と変容を明らかにすることを目的とした。具体的には、ジェロントロジー研究の成果を踏まえ、「老い」が文化的、思想的に構築され、また、身体を通じて経験される過程を検証すると同時に、これらの多層的な「老い」の現実を文学作品がいかに表現しうるかを探り、「老い」の意味と経験を複眼的に理解することを試みた。

（１）本研究は「老い」の言説の歴史的記述を第一目的とするものではないが、時代変遷に注目することは「老い」の文化的構築過程を理解する上で有効である。20 世紀後半以降のイギリスには、「老い」の現実と概念の変容を導くような文化的社会的変動があった。それは、人口の高齢化のみならず、物質的・経済的豊かさの向上、消費文化の活発化、新自由主義の浸透、フェミニズム思想とジェンダーの変遷、性と身体に対する意識の変化、などである。これらは、老いの考え方にも大きく影響を与えたと思われる。これを明らかにするために、社会学・文化学分野の研究成果を検討し、さらに、一次資料を調査することが有益と思われた。

（２）老いの文化的構築性が指摘される一方、身体の重要性が強く指摘されている。この根底には、老いの文化性を強調するあまり、老年期に訪れる身体的変化を無視、または、否定する傾向への危惧がある。特に、アイデンティティーは社会的外的要因によって構築されるという社会構築主義、その理論的土台となったといわれるポストモダン理論（言説構築理論、パフォーマンス理論）は、人間の身体とアイデンティティーの可塑性を訴えた。しかし、この思想的潮流が実は、老いを克服すべき対象と位置付け、老いについての否定的言説を生産し、アンチ・エイジング文化に拍車をかけたとの批判がある。こうして、老いの研究において、身体に改めて向き合う必要性が唱えられていた。本研究課題においても、身体に注目しながら老いの経験と主体の形成の過程を理解することを目指した。特に、フェミニズム理論、ジェンダー論の視点から、女性の身体と老い、老いとジェンダーの相関性を考察することにより、老いの文化性及び身体性の相関性の理解を深めることを意図した。

（３）（１）と（２）の文化状況や研究動向を踏まえ、文学作品に描かれる老いを考察する。これまで文学ジェロントロジーで扱われたテキストは、一部の作家や作品に限られており、その対象をより多くの作家・作品に広げることが必要と思われた。

また、既存の文学ジェロントロジーにおいては、テキストの文学的特性が十分に考察に活かされていない傾向があった。しかし、老年期と老年者の他者化、否定的言説の固定化が問題としてある現状を鑑み、そして、文学作品が言語を通した表象行為であることを考えると、老いの他者化の問題に文学作品が働きかける役割は大きいと考えられる。そこで、文学的特質（ジャンル、言語、語りの構造や形式、主題発展の手法等）が、いかに老いの経験と主体を描き出すか、主体と身体の関係、心理的葛藤や成長がどのように主題化されるのかを検証することを目指した。

３．研究の方法

主に、（１）文献・事例研究、（２）文学作品、映画等の文化作品の分析考察、（３）学会での意見交換・情報収集を通して、研究を進めた。

（１）文献・事例研究の目的は、関連研究分野における重要な論考や事例研究を把握・理解することであった。直接的・間接的に「老い」を構築する文化、言説、社会システムの認識を深めることに努めた。

（２）（１）を踏まえ、さまざまな文学テキスト、映画その他の文化テキストの分析を行った。(例：イギリスで発行されている 50 代以上向けの大衆雑誌 *Saga Magazine* の収集・調査、Mass Observation Project の保存資料の収集・調査)

（３）欧米文化圏の人文学分野における「老い」の研究は、発展過程にあるため、学会での成果発表、意見交換・情報収集が非常に重要であった。

４．研究成果

本研究課題の目的にあったように、様々なテキストの研究を通じて、老いの文化性及び身体性の理解を深めることができた。文学テキストに関しては、当初予定したように数多くの作家・作品を取り上げることが出来なかったもの、A. S. Byatt や Salley Vickers 等、これまで老いの文学研究で扱われなかった作家の作品を読解することができた。そして、文学的特性に注目したことで、老いに新しい意味、表現を付与する文学テキストの創造性を検証することができた。

これらの成果は主に、（１）文化テキストを対象に老いを考察したもの、（２）文学テ

キストを対象にしたもの、（３）老いと関連が深いとされる認知症に焦点をおいたものに分けられる。以下、それぞれについて概略する。

（１）映画や雑誌、歴史資料を対象に、老いの文化的言説が生産され、流通する過程を考察した。具体的には二つの研究を行った。

①老いと身体：文化的視点から
マーガレット・サッチャー元英国首相が、メディア及び文化作品でどのように表象されてきたかを分析し、その時代的変遷を考察した。具体的には、高齢に達し認知症を患った彼女の政治人生をテーマとし、公人の伝記的物語という意味合いを持つ劇と映画の各一作品を分析対象とした。これらの作品は、実人生における現役全盛期と老齢期の乖離が、伝記ジャンルが希求する一貫した物語の成立を特に困難にすることを露呈し、その結果、「老い」の否定的意味合いを覆し切れていないことを明らかにした。メディアでの扱いも踏まえ、現代社会において「老い」が依然として否定的な意味合いをもつことが理解できた。

②1986 年から定期刊行されている、50 代以上を対象とした大衆雑誌 *Saga Magazine* の収集・調査。大英図書館、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学の各図書館において 2000 年代半ば頃までのほぼすべての号を調査した。その結果、消費文化の高まりと新自由主義的思想が、老いの言説及び老いの経験に影響を与えていることが観察された。

③University of Sussex に所蔵されている Mass Observation Project の保存資料のうち、老いに関連する同内容の二つの directive（1992 年、2006 年）への回答の収集、調査を行った。これらの Directives では、多様な背景をもつ回答者が、個人的経験、または、日常的考察を踏まえて、老いについての思いを綴っている。これを読むことで、老いの主体的経験や老いについての考え方が、文化的言説に深く影響を受けている様子を具体的に考察することができた。同時に、抑圧的な言説を自意識的かつ批判的に捉えている個人の存在も少なからず認められた。さらに、14 年の隔たりのある二つの directives の回答を比較することで、老いの経験と意味が変遷していることも明らかになった。

（２）老いと身体：文学的視点から

①初老のイギリス人女性が旅に出るという共通の設定をもつ三つの小説作品(Margaret Drabble, *The Seven Sisters*(2002); Michèle Roberts, *Reader, I Married Him* (2005); Salley Vickers, *Miss Garnet's Angel* (2000))を通して、女性と老い、身体の関係を考察した。日常から脱して異空間に移動をするという物語構造が、女性の心理的かつ身体的な「老い」の経験を鮮やかに描くのに効果的な役割を果たしている一方で、「老い」の一面的な意味が助長されていることも示し、小説作品が「老い」の新しい意味を創造する難しさを指摘した。

②A. S. Byatt の短編作品（'Medusa's Angles'(1993); 'The Dried Witch'(1987))を読解し、女性の老いの経験とアイデンティティー形成において、身体が強く影響する過程を考察した。また、文学的創造力にも注目し、物質的比喩や、神話を多用した間テクスト性が、老いの表現を豊かにしていることを示した。

（３）認知症と文学表象
認知症は老いに必然の病ではないが、加齢が発症の大きな一因であるとされており、ジェロントロジーにおける重要な課題として取り上げられている。特に、認知症の概略的で限定的な理解が、認知症と認知症者の疎外につながっているとの問題が指摘されている。つまり、認知症を自己の喪失と同一視する傾向が、認知症への恐怖を煽り、また、認知症者の主体性が尊重されない状況を生んでいるということである。この問題を踏まえ、ジェロントロジー分野の研究成果を参照しつつ、認知症を扱った A. S. Byatt の短編作品（'A Pink Ribbon'(2003)）を読解した。その結果、Byatt のテキストが、認知症をもつ人間やその経験を表現＝語ることの可能性を示唆する一方、言語・他者表象の限界について強い認識を促すものでもあるとの解釈に至った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 迫 桂 、 'Ageing, the Body and Subjectivity in Three Stories by A. S. Byatt'、『慶應義塾大学日吉紀要英語英米文学』、査読有、61 号、2012、107-55

〔学会発表〕（計３件）
①Katsura Sako & Sarah Falcus, 'Travels to Italy: Women, Ageing and the Body in Liminal Space', *(Wo)man and the Body*, the Fourth Biennial International Conference of the Contemporary Women's Writing

Association, 台湾（台北)、2012 年 7 月 12 日
②Katsura Sako, ‘The Body, Memory and the Old Spirit in A. S. Byatt’s “The Pink Ribbon”’, *Theorizing Age: Challenging the Disciplines*, the European Network in Aging Studies Inaugural Conference, オランダ（マーストリヒト)、2011 年 10 月 6 日
③Katsura Sako, ‘Resisting Fatalism and the Decline Narrative: Margaret Drabble’s *The Seven Sisters* (2002)’, *New Cultures of Ageing Conference*, イギリス（ロンドン、ブルネル大学)、2011 年 4 月 9 日

６．研究組織

(1)研究代表者

迫　桂（SAKO KATSURA)
慶應義塾大学・経済学部・講師
研究者番号：60548262

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし